

# 清閑寺

季は	地は	後	前
秋	山城	ワキ シテ 前に同じ	ワキ シテ 叡山の僧 里女
		小督局	

「是は比叡山より出でたる僧にて候。秋も末になり候へば。時雨に染むる紅葉の色。さまぐなるが面白さに。我立つ杣の山伝ひ。音羽の峰に出で、候。又是なる山陰にひそかなる寺の見えて候ふは。承り及びたる清閑寺にて有りげに候。立ち越え一見せばやと思ひ候。

サシ  
「我此寺に来て見れば。さすがに都遠からで。かる靈地のありけると。知らでぞたゞに過しつる。

歌  
「年月の。古き寺井は水澄みて。く。流れの末も濁りなき。御代のためしに引きなれし。御裳濯川もかくやらん。げに面白や斧の柄も。此山陰に朽ちぬべし。く。

詞  
「あら不思議や間近う琴の音の聞え候。慕ひて聞かうずるに候。

シテ女  
「今日は嵐の烈しくて。且つ散りそむるもみぢ葉を。かき改めて陵の。あたりを清め奉り。玉の小琴を

かきならし。

地「比翼連理の語らひも。変はれば変はる世の習ひ。

とにかくに恨めしや。飽かぬ別れの中々に。会者定離と聞く時は。兼ねてしるき理り。春の花も散り果てゝ。猶も卯月の若楓。秋は紅葉に染めなして。錦おりかく神無月の。山風に誘はれ。庭に散り敷くもみぢ葉を。かき集め林間に。酒暖めて紅葉は。煙と立ちのぼる。生者必滅の理りや。生者必滅の理り。

ワキ「如何に是なる女性に尋ぬべき事の候。

シテ「こなたの事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ「是なる塚に植ゑられたる紅葉は。取り分け色深く候。見申せば塚のあたりを懇ろに清め。琴を調べ給ふは。何と申したる御事にて候ふぞ。

シテ「さん候是は高倉院の御廟にて候。紅葉にめでさせ給ふにより。紅葉の君と申し習はし候。されば御

しるしに楓を植ゑられて候。又是なる塚は小督の局のしるしなり。わらはも小督のゆかりなれば。折々琴をかきなし。御廟を清め奉り候。

ワキ  
「さては御名も世の中に。高倉院の御廟と聞くとも。不思議やあたりを見渡せば。並ぶ御廟もなき山に。いかで納まり給へるぞ。委しく語り給ふべし。

シテ  
「さらば語つて聞かせ申し候ふべし。さても高倉院御在位の御時。小督の局行方知らずなり給ひし

かば。たゞひたすらの御歎きに。御命も危く見えさせ給ひしに。東山清閑寺に小督ありと聞し召され。我むなしくなりにし後は。此寺に葬り申せとの。御遺言を違へず此所に納めしなり。されば小督の局毎日花水を捧げ。琴をならして手向をなし。其後に小督も空しくなり給へば。憚ながら御廟のほとりに。かくしるし立てしなり。浅からざりし御契り。短き夢と覺めはてゝ。昔語ぞ恨め

下歌地  
しき。

「げにや高きも賤しきも。なほ定めなき世のためし。

上歌  
「むかしは玉樓金殿の。く。床を磨きて起臥の。

今は紅葉の散り敷くや。是ぞ錦の御蓐。山風はげ  
しき折々は。音楽を奏す心地して。絶えず流るゝ  
谷水の。外に音する人ぞなき。かくて夕日も傾けば。  
ば。く。暇申して琴の音を。又かきならしか

きならし。たつや錦の村紅葉の。散りのまぎれに。

かき消すやうに失せにけり。く。  
(中入)

ワキ詞  
「さては小督の幽靈かりに顯はれ。我にま見え給ひ  
けるぞや。

歌

「猶も奇特を深山辺の。く。松も木深き月影に。  
早くもしるき琴の音の。嵐につれて聞ゆなり。

く。

後ジテ  
「琴の音に嶺の松風通ふらし。何れの緒より調べそ  
めけん。

ワキ 「不思議やな夜も更方の月影に。爪音けだかき琴の  
音の。さも面白く聞ゆるは。小督の局にてましま  
すか。

シテ 「さも恥かしき我姿。春を忘れぬ花の袖。

ワキ 「恨みながら打ち返し。猶も昔を語り給へ。

シテ 「今宵は風もをさまりて。名にし負ひたる寺の名も。

ワキ 「清く静けき谷水の。

シテ 「音羽の山も嶺つゞき。月も隈なき靈地かな。

クリ地 「それ一榮一落の世の習ひ。昔の春の花盛。並ぶ梢も  
なき身にて。連理の契り浅からず。三千の寵愛一  
身にあり。

シテサシ 「かくたぐひなき御語らひ。平相国に漏れ聞え。

地 「たばかり我を失はん。所存と聞きて鳥羽玉の。夜  
半にまぎれて忍び出で。嵯峨野の奥に身を隠す。  
シテ 「主上は思ひに打ち臥し給ひ。

地 「秋も最中の月にだに。御格子なども上げられず。

「深く涙に沈ませ給ふ。

クセ

「さる程に仲国は。寮の御馬を賜はりて。名月に鞭シテをあげて。駒を早め行く程に。嵯峨野の里の何くにか。忍び給ふと賤の屋の。片折戸をしるべにて。駒をひかへて嵐ふく。松の響か琴の音か。それがあらぬか聞き分かぬ。時雨する夜も時雨せぬ。雲霧も立ち晴れて。空も隈なき秋の夜の。月にあくがれ出で給ふと。法輪に参れば。さてこそしるき嬉しき。

シテ  
「かかる山路の末までも。忍ばせ給ふ御情。有難しく。いつの世にかは忘草。摘むともかひあらじ。岸に生ふてふ住吉の。松とし聞けば帰らんと。いらへ申せし水茎を。受けて喜ぶ仲国は。雲の上にぞ帰りける。百敷や。古き軒端の忍ぶにも。

(舞)

シテ  
「百敷や。古き軒端の忍ぶにも。

地 「あまりて漏るゝ昔語や。

シテ 「かくて夜もはや明方の。

地 「かくて夜もはや明方の雲も。山の端に横ぎる。さ  
も面白き。月の夜の明ぼの。是までなりと又陵の。  
前にたゞみ。

シテ 「想夫恋の。

地 「樂の手を尽し。

シテ 「さるにてもく。

シテ 「昔恋しや。  
地 「此君に。

地 「飽かで別れし恨の末は。めいくとして。絶ゆる  
期もなかるべし。暇申してさらばとて。かへす袂  
にうつるや陵の。しるしの紅葉を立ちめぐる。天  
津乙女の姿もとゞまらぬ。雲の通路中絶え果てゝ。  
其まゝ夢とぞなりにける。

底本 .. 国立国会図書館デジタルコレクション  
『謡曲評积 第九輯』 大和田建樹 著